た御様子で、時間よりはやいめに来られ、向いの部屋で弁当をたべておられるのが、たびたびで、教室へは〃わらぞうり〃をはいておいでになることもありました。畑ちがいといゝますか、歌謡の方面をやつています私などのようなものは、先生のお話しをおききしてもすべて本当に理解するところまで、とうていついてゆけなかつたようですが、それでも興味あるお話しでした。〃韻鏡〃をずつと順にお話しになつたところなども、色々と先生の御意見、御説を知ることができました。その二・三を、結論だけあげてみますと、

「内転第五合、喉音の清濁にある〃為〃の字を、万葉集では、たとえば〃乎為里〃（……春去奴礼婆　山辺爾波　花咲乎為里　河湍爾波　年魚小狭走云々→四七五番など）とあるのを〃烏〃の字と誤つたのではないかとするのはよくない。古い音、つまり周代のものに帰らねばならない。〃韻鏡〃より古い韻を知つている日本人が〃為〃を〃ヲ〃として発音したのであろうか。有坂秀世氏の説は、ib〉ie〉iとするのであるが、それはむしろ、ib→iφ→ieと変化してゆくのであつて、つまり、中間に、φの入る過程があるとみなければならないということ。そこで為はiwφであること。」

「外転第十五開にある〃祭〃の字は、カールグレンによるとiæiであるが、そうではなくiɨiにすべきであること。」

「広韻を見ていたであろう韻鏡の著者が、韻鏡の原本に新らしい字を加えたことのあつたのも想像される。それを具体的に見ることは少いようであるが、第十七開、喉音、濁、にあらわれる『麸』の字などがそれであること。」

「韻鏡の著者は、その書に何の注解も説明も加えていない。しかしそこには、大きな意図と大系がかくされていて、著者はわざと何も語らない。じつとながめて、考えて、やがて悟ることを期待していたのか。」

などといつたことを御話しになつたように記憶する。ノートの方ももつと色々書いておけばよかつたとおもわれます。

病弱でいらつしやつた先生は、それでも大学院生のもつた新年会なる小さい集りにも出てくださいました。はやいめに帰られましたが、ひどい吹き降りの日でした。それから数日後、あの雨で自動車はひろえず、えらいめにあつた。あんなのははじめてである。といつた旨のことを私におつしやつたことがありました。たいへん申し分けなく思いました。車を拾つてさしあげるべきだつたのです。日ごろ雑談の中で、自分はさびしいといつたようなことをときどきおつしやつていましたので、なおさらです。

韻鏡を中心とする研究がもうほとんどまとまつたものになりかけているので、もう少し手を加えて、どこかの雑誌に発表しようと思うのだがというようなこともおつしやつていました。ぬくいのは体によくないと言われていましたが、今年の夏は気候が不順だつたのもいけなかつたようです。もつと研究していただきたかつたと思われます。

（本学大学院在学中）

宮嶋　弘先生をおもう

水田　潤

昭和二十二年、私が立命館大学を受験したとき、最初にお目にかかつたのが宮嶋先生である。口答試問の担当が先生であつた。もちろんそれが宮嶋先生であつたと知つたのは、

入学を許されて先生の「国語学特殊講義」を受講してからのことである。復員後間もなく、学問的にも底の浅い私にとつて、先生の講義内容はおそろしく難解であつた。戦中派の多くの人に見られるように、当時の私はきわめて雑ばくな知識しかもちあわせていなかつたし、何冊かの専門書をただ無秩序に読破したということだけの半可通のデイレッタントにすぎなかつた。しかし、卒業論文に国語学を選んだ私は、その後先生の個人的なご指導を受ける機会が多くなつていた。東山小松町の先生の旧居をお訪ねする機会も多くなつていた。東山の電車道から西への下り坂をすこし、先生の旧居は左側にあつた。いわゆる京造りの玄関で、私はいつも先生の時間のあくのを待つた。「先生は、今お手がはなせぬお仕事がおすので、ちょつと待つとくれやす。」お手伝いのおばさんらしい老婆のことばはいつもこのようであつた。それでも書斎へ通されてからは、親切なご指導をいただいた。先生のいわゆる奇人ぶりに接したのもこうした機会であつた。

私は私なりに先生のその奇人ぶりを理解していつた。当時の先生には、女医の奥様があつたと記憶するが、ついぞ奥様のお顔を拝する機会はなかつた。

卒業論文の提出期日が迫つたある日、私は先生から「まあこれでだいたいよろしい。」のおことばをいただいた。審査の為の面接の日にも同じおことばをいただいたが、先生の評点は、私の期待を裏切つてかなりきびしいものであつた。当時私は卒業論文に国語学（というよりは宮嶋先生）を選んだことを後悔した。しかし、間もなくそんなことも、先生の学問に対するきびしさを物語る一つの側面にすぎない。ということを理解できるようになつた。ところで卒業以来何年かたつた昭和三十年の冬のある日、突然先生から御便りをいただいた。それは、私に対する非常勤講師へのお誘いの手紙であつた。時候のあいさつまでそえたごていちような御便りであつたのには恐縮した。私は、さつそく東山に先生をお訪ねしてご指導を仰いだ。そのときのおことばが今も記憶の底に新しい。「僕は解釈学についてまとめたノートを持つてるが、僕のはもうねずみに喰われたようなもので。……」当時、そのおことばの真意を私はじゆうぶんに理解することができなかつた。それを国語教育学で「解釈学」の課題にとりくめとのおことばであつたと気づいたのは、それから何年も後のことである。不覚というほかはない。当時の国語教育界は、まだアメリカ直輸入の経験主義が根づよく支配していた。「解釈学」を我が国に始めて紹介し、斯学の開拓をはじめたのは、言うまでもなく垣内松三氏であり、それは昭和の初年にまでさかのぼらねばならぬが、当時、先生はこの学説の再検討を私に暗示されたのではなかつたか。不幸にしてその後病床に伏せられた先生からは、このことを質す機会に恵まれなかつた。また、それ以後先生の言われた「解釈学」の意味、方向についてのご教示を得る機会もついに逸してしまつた。今私は、私なりに国語教育科学としての「解釈学」の問題にとり組んでいる。しかし、今はもう宮嶋先生は亡い。今、私の机上には、これもすでに故人となられた垣内松三氏の「国語解釈学」「形象論常説」以下の諸著があるだけである。宮嶋先生の突然のご他界がくやまれてならない。宮嶋先生のご教示に気づかずにいた数年の空白が惜しまれてならない。先生のご冥福を多くの学友たちとともにお祈り申し上げたい。（昭和二五年三月卒、池田市教育研究所）